

<町史だより>



※まちの秘話 ⑤

各分野における調査過程の情報の一部をみなさまにお知らせします。

～ 桑名藩主の交替と領内騒動 ～

江戸時代に朝日町を構成していた柿・縄生・小向・埋縄の各村は、文政6年（1823）までは桑名藩の領地であった。この年の藩主交替は、桑名藩主が武蔵国忍へ、忍藩主が奥州白川へ、白川藩主が桑名へという三角トレードであったが、忍藩の領地に田畑が不足するため、桑名藩領内の72ヵ村が忍藩領に組み替えられた。朝日町域のうち埋縄村だけは組み替え分に入り、のち幕府領をへて安政元年（1854）に再び忍藩領に戻っている。

この転封は、桑名藩領で大きな農民騒動をひきおこした。そのようすはかなり明らかになってきているが、このたび町史史料調査において歴史博物館所蔵史料のなかから新情報が見つかった。史料は家内や村、地域のできごとをしるした年代記で、作成者は小向村の村役人層であった家の人と思われ、仮に「小向村覚え書」と名付けておく。これと『桑名市史』などを合わせて騒動のようすをまとめると、次のようになる。

国替えが桑名藩領の村方に知らされたのは文政6年3月28日のことで、4月6日に歎願のため町村の総代が江戸へ向かった。このときの歎願内容は国替えの日延べだったらしい。桑名藩領内には藩が各村の庄屋を指導して実施させた積立金制度があり、集まった金は藩が借り入れて財政の補助に充てていた。転封にあたって領民はこの積立金の返還を願ったが、旧藩主役人からは「1口4両3分ずつのはずだが、1両減額して3両3分を3年に分けて返す」と通達があり、庄屋から村々へ伝えられた。しかし農民たちは承服できず、まず石榑村（いなべ市）の者が8月2日ごろに城下へ歎願に出た。つづいて丹生川（同）・田光（菰野町）などの村々が「大くずれ」の事態となる。人々は鐘・太鼓を打ちならし、斧や竹槍を持ち、「オイオイ、エイエイ」と声を上げて何千人と集まり、庄屋・郷代官の家を土蔵まで打ち壊したという。襲撃をまぬがれた庄屋の家は少なく、朝日町域では縄生村庄屋だけが「小向村覚え書」にあげられているから、それ以外の3ヵ村の庄屋家は打ち壊されたのであろう。藩側では鎮圧に努め、8月10日に願いを認めると申し渡しをしてようやく鎮まった。

8月21日から旧藩主の家臣はおいおい桑名を退去していく。9月には番所などが新藩主側へ引き渡された。新藩主の松平定永は文政7年5月10日に桑名に入城し、大きな騒動の直後を配慮した施策をしている。まず6月26日に領民に酒を下賜し、小向村でも「庄屋方にて皆々寄り合い、ありがたく頂戴」した。また「八天狗御札」を領分各町村へ配り、小向村では8月3日にそれをまつる小社を建てて全村休日とした。小社には毎月3日に水を供え、その水を家ごとに配って屋根にかけたというから、火災除けの御利益があったのだろう。高齢者への手当ても支給され、小向村では忠六の父が90才以上として「1人扶持」を与えられて11月2日に組内の者が忠六方で酒飯の振る舞いを受けた。これらの慰撫策は効果をあげたようで、11月29日に村々庄屋が進物をもって城へあがった。騒動鎮圧のとき認めるとされた要求の多くは実は叶えられなかったのだが、かつての激情は沈静化し、新藩主を戴く心構えがととのったといえるだろう。

町史のための調査によりこうした地元でのようすを伝える史料を見つけることができた。これからも、新しい資史料の発見につとめていきたい。

記：町史専門部委員・文献史料部会 眞 真理子